

赤とんぼ～心の情景

三 木 メ イ

奨励者紹介〔みき・めい〕

同志社大学キリスト教文化センター准教授

〔研究テーマ〕キリスト教の実践神学（女性学、人間関係、牧会）

疲れた者、重荷を負う者は、だれでもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう。わたしは柔和で謙遜な者だから、わたしの軛を負い、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたは安らぎを得られる。わたしの軛は負いやすく、わたしの荷は軽いからである。

（マタイによる福音書 11章28—30節）

タやけ、こやけの赤とんぼ

今日は、皆さんがよくご存知の「赤とんぼ」の歌の作詞者の三木露風のお話をしたいと思います。

昨年11月3日に、この言館で、オルガニストの川崎寿美さんを含め音楽家4名によるチャペル・コンサートが行われました。山田耕筰作曲の日本の曲がいくつか含まれているプログラムになっていました。そして、最後のアンコール曲として選ばれていたのが、誰もがよく知っているあの「赤とんぼ」の歌でした。会衆の皆さんも一緒に歌いましょう、ということで、私も久しぶりに、赤とんぼの歌を歌いました。「ゆうや～け、こやけ～の、赤とんぼ～、おわれ～てみたの～は～、いつの～ひ～か～」

今の時代では、年代によって覚えている歌や好きな歌がバラバラなのが当たり前ですが、「赤とんぼ」の歌は、日本で育った人であれば、どの年代の人でも知っているし、歌えますね。聞くとところによると、中学校の音楽の教科書にはこの歌が載っているそうです。

私はコンサートの気持ちのよい余韻に浸りながら帰宅したのですが、だんだんと、この赤とんぼの歌の歌詞の3番の「じゅうご～でね～や～は嫁にい～き～、おさと～のたより～も～たえは～て～た～」という歌詞が頭に浮かんできて、この歌詞を書いた人は、この歌の言葉でいったい何を表現したかったのだろう、と気になってきました。それで、この歌詞を作った三木露風と赤とんぼの歌のことを調べてみようと考えました。

三木露風はクリスチャン

それで、図書館で和田典子著『三木露風 赤とんぼの情景』（神戸新聞総合出版センター 1999年）という本を借りて、読んでみました。そして、三木露風の生涯や、赤とんぼの歌の背景などについて、いろいろ知らなかったことが分かって、とても面白いなと思いました。中でも一番驚いたのは、この三木露風は、33歳の頃にカトリック教会で洗礼を受けたクリスチャンだったということです。

彼は北海道のトラピスト修道院の文学講師として赴任して、その二年後の大正11（1922）年に、妻と一緒に洗礼を受けています。あの「赤とんぼ」の詩は、その前年の大正10年に作られたのです。ある日の

夕方4時頃、トラピスト修道院にいる時に、とんぼが竿の先にとまっているのを見て、小さい時のことを思い出して作った、と本人がある機関誌に書いています。露風の本名は「三木 操」といい、現在の龍野市辺り（姫路の近く）で生まれたのですが、彼が満5歳の頃に両親が離婚してしまって、お母さんが鳥取の実家に戻ってしまったのです。それで寂しい幼少期をすごしました。その後、彼は父ではなく、祖父母の家で育てられ、小さい時には子守りのために雇われた女の子（姐や）に世話してもらっていたそうです。その姐やに背負われて、赤とんぼが飛んでいたのを見た。それを北海道で赤とんぼを見て思い出したのだ、と書いています。そして、その子守り娘は、彼が大きくなってから里へ帰り、のちに嫁に行ったと聞いた、というのです。

私が読んだ本の著者の和田典子さんは、これは姐やを想う詩というよりも、母を恋しく想う心を表現した詩だ、と解釈しています。それは他の多くの詩にも、母への思慕の情を思わせる言葉を連ねているからです。露風は、象徴詩の詩人と言われていて、一度読んだだけではよく分からないような部分があります。しかし、その詩を読む人のイマジネーションをかき立てるような情感が込められているので、それが多くの人の心を揺さぶるのだらうと思います。詩を読む人に、それぞれの幼い頃に親しんだ自然や優しい母を切なく思い出させる何かを感じさせるものがあるのでしょう。

ボロボロの青春時代

彼は幼い頃に母から『家庭読本』という当時の児童向け教育書を読んでもらっていたので、それで詩や文章に興味をもつようになったそうです。そして13歳の頃に「赤とんぼ、とまっているよ 竿の先」という言葉を書いたのだそうです。彼は、14歳頃からは文学雑誌や新聞に自分の詩を投稿したりして、その才能を開花させた、とても早熟な詩人でした。詩を作ることに熱中していたせいか、中学校は一度転校して、その後退学、17歳の時に東京に出て商業高校に編入学したのですが、また退学してしまい、親に勘当されて仕送りがなくなり、貧しい生活をするようになります。その後も20歳の頃には早稲田大学の予科に入ってまた退学、再入学するも病気になり、無断欠席と授業料未納でまた退学。それでも自分の詩を投稿し続けて、出版社の社長や知人に助けられて、慶応大学に入学するのですが、また授業料未納で23歳で大学を除籍になり、また病気になってしまいます。

とにかく、文学活動は精力的にやって詩集なども出版しているのですが、それでも生活に十分な収入は得られなくて、かなり悲惨な青年時代をすごして、精神的にボロボロだったのではないかと思います。20歳の頃の手紙にはこうあります。

「今日僕は、あらゆるものに対して否定しているので、友達はもとより、兄弟も親も血族も恋も信仰も一つとして現代において信ずべきものはないと考えています。昔は恋もしたことがあったし、最近においては洗礼まで受けて神にすがろうとしたこともあった。しかしながらそれらは、すべて空虚なる幻像もしくは虚偽であったのです」。

ということは、彼がキリスト教に出会ったのは、この20歳の頃だったのです。これに続いて彼はこう書いています。

「自意識の強い感情の鋭く尖った近代的傾向を受けている僕らには、哀れや人を信じ神を信ずることが出来ぬのです。……迷っているものに信仰はない。迷っているものに人を信ずることがどうしてできましょ

う」(前書 165～166頁。奨励者により一部変更)。

赤とんぼの歌と信仰

このように東京での都会生活に疲れて、一時重体にまでなった露風は、友人から借金して入退院した後、熱海で療養しながら、また毎日詩を作る生活をして、詩集を出版しています。彼の孤独と寂しさを慰めたのは、自然の美しさであった、と著者は書いています。露風は、友人に「海と花と母とは大好きにて候」と書いています。そして、詩の中で、「海よ、おまえは母のようだ……海よ、私に語ってくれ、お前の優しい心を」と書いています。幼い頃に別れることになった優しい母への思慕の情を、目の前に広がる海に投影して、彼は語りかけています。

25歳の時に、妻となる女性「仲」と婚約し、そしてカトリック教会の宣教師と日本人の伝道師と出会って、カトリックの教義やトラピストの話を聞きます。そして北海道に行き、仕事をしながら詩を書き、洗礼を受けました。「赤とんぼ」の詩は、その時期に書かれたわけですが、和田さんは、この詩には、大人の露風が、赤ん坊の時の自分、3歳から7歳頃の自分、10歳頃の自分、13歳の自分の思い出をつないだ形で構成されていると分析していました。ただ、私が少し残念に思ったのは、信仰をもちはじめた頃の露風の心境の分析が、著者のこの分析には全く含まれていなかったことです。

「タやけ、小やけの赤とんぼ、とまっているよ、竿の先」。この最後のフレーズは、確かに13歳の時に最初につくった詩ですが、それから約20年経った後の露風にとっては、さらに深い意味をもつ言葉であったはずであろう、と私は思います。13歳の時には、竿の先にとまった赤とんぼは、母も姐やもない寂しい孤独な自分の姿を投影したものだったでしょう。しかし、33歳の露風は、豊かな自然に囲まれた静かな修道院で、仕事と妻を得て、経済的にも、精神的にもやっと落ち着いて、明るい希望をもって自立の道を歩みはじめていたのです。

その20年間の歩みを、彼は思い起こしたに違いないと私は思います。

竿の先にとまっている赤とんぼは一匹ではありますが、自分の足でしっかりと自分の体を支えているのです。多くの人の支えがあったからこそ、そこまで彼は自立できたのです。それを竿の先にとまっている赤とんぼに見ていたのかもしれませんが、そして、その状況にいたるまでの神の導きへの感謝の思い、彼の神への祈りの姿を重ねていたのかもしれない、と私は思います。

「重荷を負う者は誰でもわたしのもとに来なさい。休ませてあげよう」。

この聖書の言葉は、人生の中で幼い頃に母を失った悲しみや青春時代の苦しみを背負って生きてきた三木露風の心にも深く響いていたでしょう。33歳の頃に見た、竿の先にとまった赤とんぼは、彼にとっては、神の足元で休んでいる自分であり、あるいはいつも自分と共にいてくださった神、心癒す自然を与えてくれた神だったのかもしれませんが。

露風は、その後宗教詩なども創作して、死ぬまでキリスト教信仰をもち続けた、ということです。そして、母とも再会して交流をもち、母の死後には告別式の前に添い寝した、というエピソードが残っています。

自らの生き方に悩む絶望的な青春の日々から、彷徨いながらも神と人を信じ、愛することができる人生を、三木露風は信仰と詩作をとおして見いだしたのです。そして、その彼の傍らには、いつも「赤とんぼ」がいて、彼を成長へと導いてくれたのではないのでしょうか。

2019年1月9日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録